



実地の経験を積む

毎朝、私どもの短大校では、生徒たちが出勤板を返すため職員室に入り、「おはようございます」の大きな声の挨拶、そして就業の5分前、職員、生徒の全員が屋上にあがり、スピーカーの音に合わせての体操を行い、こうして学園の1日が始まります。

本校の母体である関東自動車工業は会社設立以来「必要な人材は自前で育成する」という方針のもと、独自の職業訓練・教育を展開し、実践的な技術者・技能者を育て、職場で活躍してきています。その考えのもとに、平成2年に工場製造ラインのFA化の進展に対応して、

- ・技術革新に対応できるメカトロ技術者
- ・技術と技能を併せ持つ実践技術者

の育成を目的に当工科短大校を設立し今日に至っています。

当校の使命は、製造業すなわち、「モノ作り」に密着した技術者を養成することにあります。そのため、教科にも、2年生での卒業研究、1、2年合同の夏季研修等で、作品の製作を行っています。この中で夏季研修は、2週間の期間に、同じテーマで企画・設計・製作し、お互いに競い合わせ、みんなで評価します。この前は手づくり電動自動車を作り、最後は各グループで走らせて競争しました。学科の授業ではあまり元気がなくても、このようなときには張り切って夜遅くまで製作に励んでいる子もいます。モノを作ることに多くの生徒は大変興味を持ち、また楽しんでいるようです。実際に自分たちの手で作ったモノはよく覚えていますし、学習効果も大きいはずです。そこで実験・実習の時間を増やし、それから理論的なことを覚えてもらうようにしています。

これからの若い人は、英語とコンピュータが使いこなせねばならないとよく言われています。国際化が進み、また設計、生産技術にどんどんコンピュータが入り込んでいます。確かに英語やコンピュータが使えなければ仕事はできない時代になりつつあり

ます。しかしそれらはあくまでも現代を生き抜くための単なる便利なツールであり、それだけで十分というものではありません。

最近、学生に工場を知ってもらうために、1ヵ月ほど工場実習を行いました。実習が終わったあとの職場の管理者、監督者との懇談で、現場の監督者から「最近、設計者の中には現場に来ない、現場を知らないで設計している技術者がいるが、これでは良いモノはできない。短大の皆さんはそのようにならないでほしい」との意見が出ました。私もそのとおりだと思います。

最近どうしてもカッコ良く見える仕事をしたり、見た目に汚い仕事を敬遠する傾向があります。コンピュータを使い、それで仕事はできたように思っている人がいます。現場に出向き、実際に自分でモノを作ったり、モノに触れたり、また現場の造る側の人の意見を聞くことが実際には大切なのです。そして設計者と造る側のお互いの心が通って、本当に良いモノづくりができるのだと思います。実践技術者とは、学んだ知識を「モノ作り」に生かす現場サイドの、言葉が適切かどうかわかりませんが、まさに現場技術者（現場がわかる技術者）ということではないでしょうか。

「技術は理論、技能は経験に基づく」といわれませんが、この両方を併せ持つ、すなわち基礎的な技術知識を持ち、技術と技能を理解し、設計者と作業者の橋渡しができるそんな技術者が必要なのです。

それは「机上の学問よりむしろ実地の経験のほうが貴重だ」ということなのだと思います。

ちややま たかひで

略歴 昭和44 関東自動車工業株式会社入社
昭和63 製品企画部主査
平成6 第1技術部副部長、技術開発室長
平成11 関東自動車工科短期大学校長
現在に至る